特集展示

平和のいしずえ2013

2013年7月27日(土)～9月1日(日)

栗東歴史民俗博物館で栗東市の「心をつなぐふるさと栗東」平和都市宣言をうけて、平成2年度から戦争と平和をテーマとする「平和のいしずえ」展を開催してきました。これは市内外の所蔵者の方々からご提供いただいた貴重な資料を通じ、近代以降の戦争の歴史と戦時下の生活を再現することで、地域の視点から平和について考えようとするものです。

平成25年度は、従軍の後、凱旋や満期除隊となった際、親類や知人、近隣の人々に贈られた記念品を中心に紹介します。

こうして贈られた品々の多くは「凱旋記念」や「退営記念」、「満期記念」などの文言が記された徳利や盃です。また、陸軍、海軍を示す旭日旗や星章、桜、錨などの図柄も付されています。現在では違和感のあるこうしたデザインの道具類が、太平洋戦争終戦以前には、人々の日常の暮らしのなかに溶け込んで使用されていました。

今回の平和のいしずえ展では、このような戦時下もしくはそれに準じた時代に、日常生活を覆っていた空気を感じ取っていただき、現在との相違を考えていただく機会となればと考え開催します。

栗東歴史民俗博物館

主催：栗東市　栗東市教育委員会

記念盃・徳利と地域社会

明治時代以降、アジア・太平洋戦争の敗戦まで、日本には徴兵制度があった。国民男子は17歳から40歳まで兵籍に登録され、20歳になると徴兵検査を受けた。体格などから甲・乙・丙・丁・戊の成績が付される。甲種・乙種のなかから実際に、兵営に入り、訓練を受けるものが選ばれた。こうして兵営に入っているものが、現役とよばれる兵で、入営に際しては親類や地域から餞別を受け、出発に際しては見送りの行事などが盛大に行われた。

兵役を終えて帰郷する際、兵たちが餞別や見送りの返礼としたのが記念品である。記念品の多くは盃や徳利で、ほかには盆や風呂敷などがある。

田中軍人デパート記念品カタログ
滋賀県平和祈念館蔵
福岡県久留米市に置かれた陸軍歩兵四十八師団前で営業していた、田中軍人デパートのカタログ。年記はないが、カタログに掲載される品々に、「満州派遣」「満州凱旋」などの文字があることから、満洲事変ごろのものであろう。
カタログに見られるとおり、記念品はある程度決まったデザインが複数用意されており、兵士はそのなかから気に入ったものを選び、自分の所属部隊と名前を入れるように注文するシステムであった。
栗太郡では、陸軍は第十六師団管区に所属する。当時は師団のおかれた伏見にこうした記念品を購入したと伝わる。詳細は不明だが、おそらく田中軍人デパートのように記念品を扱う店が第十六師団周辺にもあったのだろう。栗太郡出身の兵士はそうした店、もしくは郷里の陶磁器小売店などから記念品を注文し、郷里で配付したと考えられる。

兵士の見送り
昭和12～17年（1937～1942）ごろ　館蔵
出征や入営する兵士に対しては地域の団体や親類、知人が餞別を送り、出発に際しては盛大に見送ることが慣例であった。除隊の際、贈られた餞別に対しての返礼が盃や徳利といった記念品であった。

入営の日の兵士宅　昭和11年（1936）　館蔵
入営する兵士には知人や親類から餞別や写真のように多くの幟旗が贈られ、地域から盛大に見送られた。記念品は盛大な見送りと対をなす行為であった。

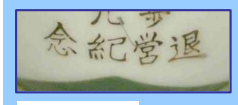
記念品に記される文言－満期・除隊・退営・派遣・出征－

満期・除隊・退営

満期とは現役の期間を満了したとの意味。徴兵によって集められた兵は、それぞれ所属の隊の兵営に入営し、陸軍では2年、海軍では3年の兵役期間を勤める。この期間を満了すると、満期で除隊、退営となる。一方、召集令状によって集められた応召兵もまた、応召期間を満了すると除隊となる。退営、除隊とは兵役を解除されることで、これにより兵は帰郷し、予備役や後備役につきながら、もとの生活へ戻ることが可能となる。

凱旋

戦時に戦争が終結し、戦地から帰還すること。または戦地へ派遣された兵が期間を満了して帰郷すること。



退営紀念

出征紀念

満期記念

凱旋記念

除隊記念

＊＊＊現役兵とは＊＊＊

徴兵によって兵営に入り、訓練を受けるもの。国民男子は20歳で徴兵検査を受けることが義務付けられており、その成績によって甲種、乙種になったもののなかから、抽選で兵営に入るものが選ばれた。

＊＊＊応召兵とは＊＊＊

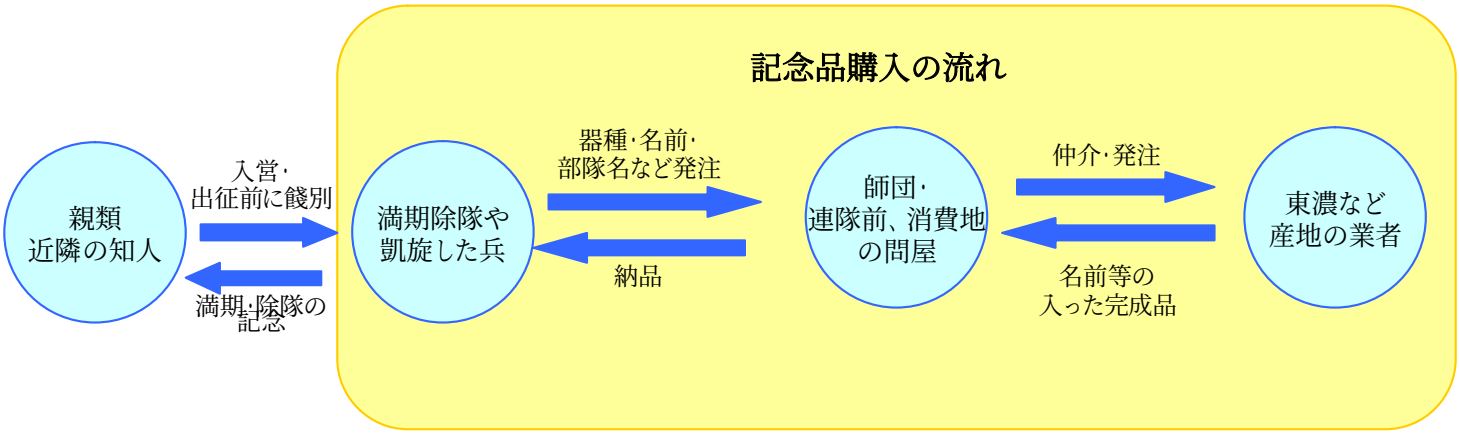
召集令状によって集められた兵。現役期間を終了すると、その後は予備役、後備役になる。戦争状態になると、現役兵だけでは戦力が不足するため、予備役、後備役へ召集がかけられた。

派遣・出征

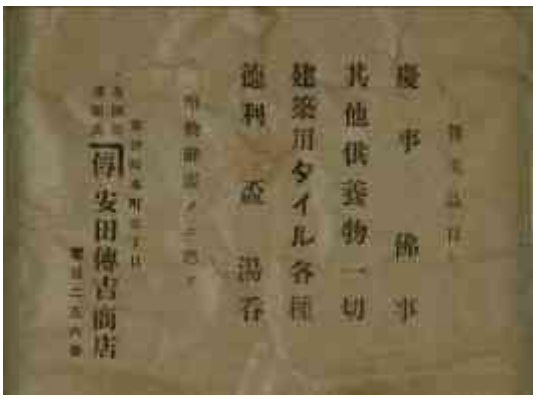
派遣・出征は戦時に戦地へ兵が送られること。

記念品はどのように流通していたのか。盃や徳利など陶器製の記念品の主な産地は岐阜県東濃地方である。この地方で生産される陶器は美濃焼として知られている。東濃地方では器種によって産地の住み分けがあり、盃は岐阜県土岐郡市之倉村（現在の岐阜県多治見市市之倉）、徳利は同郡下石町（現在の岐阜県土岐市下石町）で生産されていた。記念品のように、兵の名前や部隊名を染付けるものを印物という。印物は消費地の問屋や小売店を介して東濃地方の陶器商などへ発注される。

満期記念など記念品の印物を仲介する小売店として、栗太郡内では草津町（現在の草津市草津）の安田陶器が確認できる。また、兵が所属した部隊の門前にもこうした記念品を扱う商店があり、栗太郡出身者が多く所属した陸軍歩兵第九連隊（第九連隊は明治8年から大正１４年までは大津に、大正１４年から終戦まで伏見に置かれた。）の伏見の門前にもこうした記念品を扱う商店があったことが、収蔵品に伴う聞き書きから確認できる。



日支事変出征記念盃
昭和12～16年（1936～1941）ごろ　館蔵
未使用のまま箱に入った状態で保管されていた徳利。2本のうち1本には贈られた当時の包み紙が残っている。包み紙は草津駅から程近い草津町（現在の草津市草津）で営業する“安田陶器”のもの。この包み紙は劣化が進み、開封が困難なため、記載内容の全体は不明。しかしこれよりややさかのぼる、右の安田傳吉商店（安田商店の別称）包み紙には「慶事　仏事…（中略）…徳利　盃　湯呑　印物御需メニ応ズ」とあり、安田陶器が印物（しるしもの）といって、徳利や盃の商品に、客が必要とする文言や意匠を入れることを請け負っていたことが宣伝されている。



安田傳吉商店広告　近代　館蔵
別の盃を包んでいた安田傳吉商店（安田陶器）の広告。満期などの記念品に多く用いられる盃や徳利などの印物を扱っていたことがわかる。

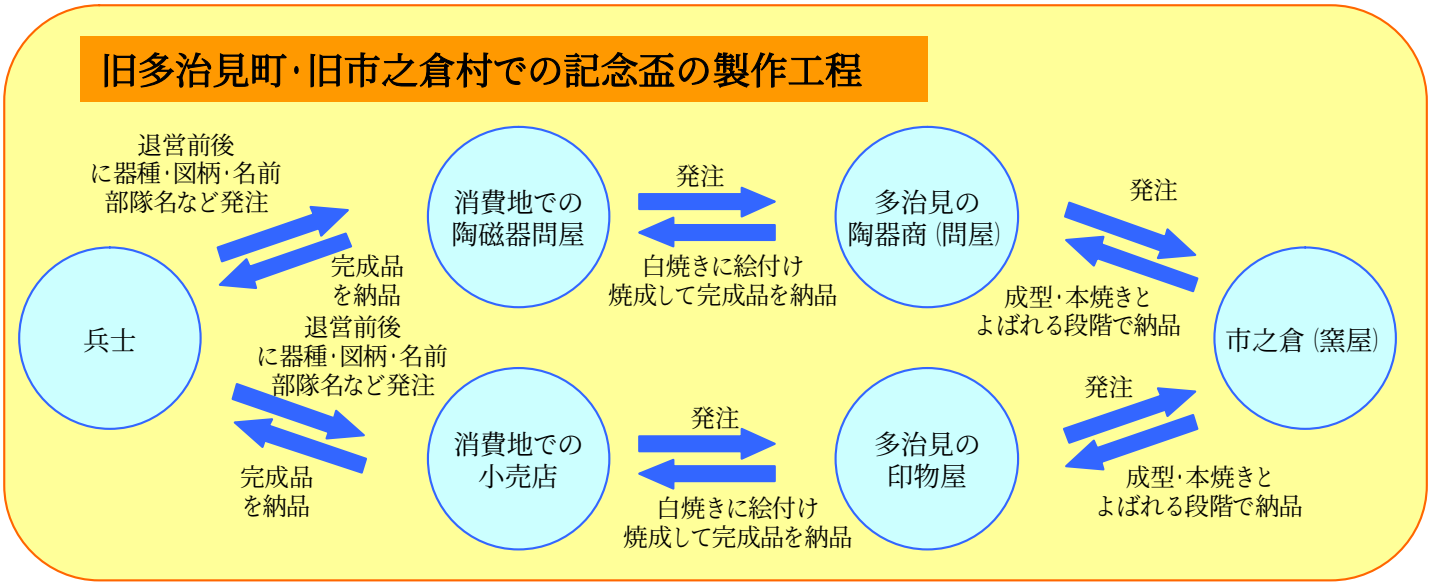
（左）解隊記念徳利　近代　館蔵
（上）底部
底部に「一洸園製」と記される。これは東濃地方で徳利を専門に製造する、下石（現在の土岐市下石町）の製造業者で、記念品がここで製造されていたことがわかる。
徳利の側面に書かれる「解隊紀念」とは、部隊が解散になった際の記念の意味で、第一次世界大戦後の軍縮によって部隊が解散になった際に作成されたものなどがある。

（左）解隊記念盃　近代　館蔵／（右）高台
高台が桜型の盃。高台は別に「浜」ともいい、記念盃の多くを生産した市之倉では“桜浜”とよばれる形状のものである。ほかに市之倉で製造された特徴的な高台としては、“角浜”とよばれる四角い形状のものがある。いずれも石膏型から成形する手法で作られる。

兵士の記念の盃や徳利の多くを製造していた東濃地方では陶磁器の器種ごとに産地が分かれる。盃については岐阜県土岐郡市之倉村（現在の多治見市市之倉）が、徳利については同郡下石町（現在の土岐市下石町）が産地であった。

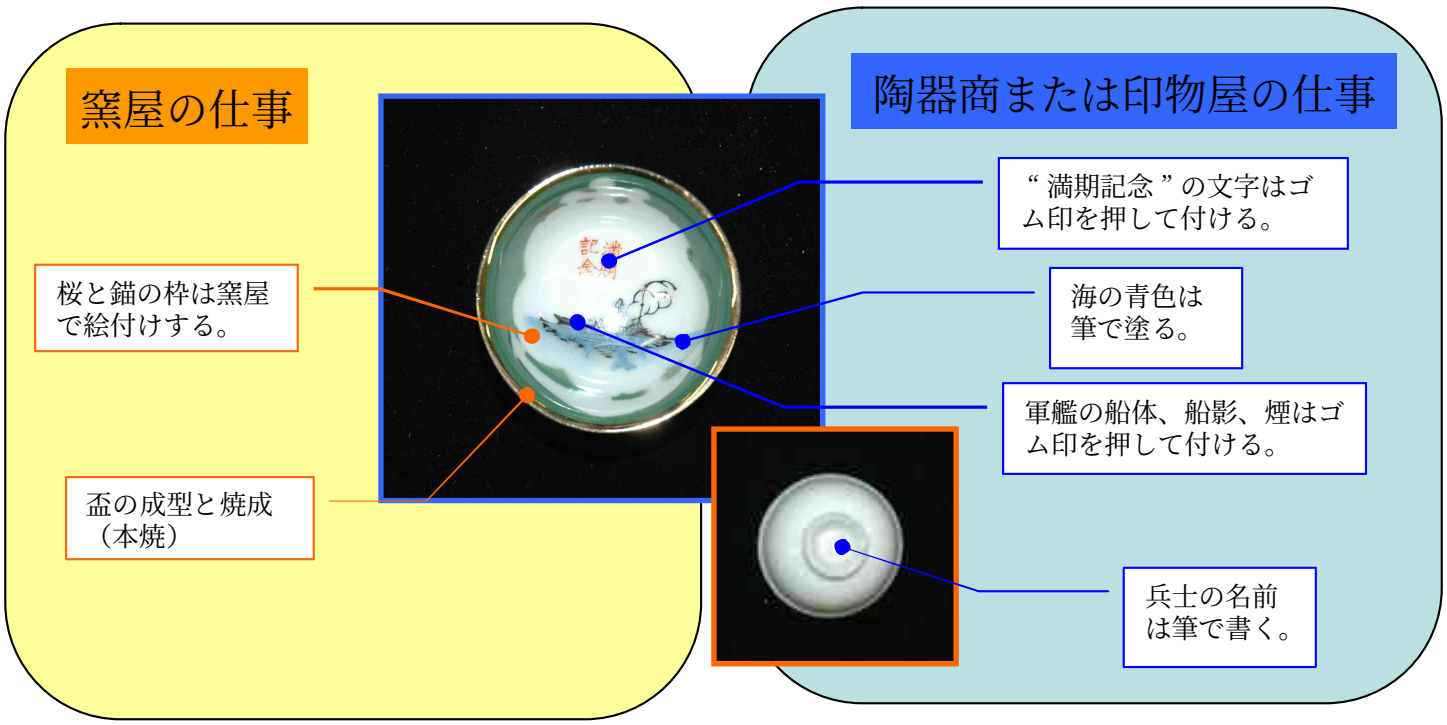
製作は大きく分けて4つの段階がある。盃の場合は、まず記念品を購入する兵士が必要な器種や図柄、数量、印入れする名前や部隊名を発注する。この発注は所属部隊の駐屯地の周辺もしくは郷里の陶磁器問屋、または小売店にかけられる。次に注文を受けた陶磁器問屋は多治見の陶器商に発注する。小売店が受けた場合は多治見の印物屋とよばれる印物を専門に扱う業者に発注する。最後は陶器商や印物屋が市之倉の窯屋に器種と数量を発注する。

注文を受けた市之倉の窯屋は盃の成型と本焼きとよばれる焼成までを行う。焼きあがった盃は多治見の陶器商もしくは印物屋に納品され、そこで兵士が注文した図柄、部隊名、名前などが絵付けされ、こんどは低温で焼成される。これで盃は完成である。製品となった盃は多治見駅から鉄道によって消費地の陶磁器問屋もしくは小売店へ輸送、納品され、それぞれから兵士へと納品される。



盃についていえば、市之倉では成型から焼成までが行われ、部隊名や「満期記念」などの文言、日章旗や旭日旗などの意匠は多治見駅周辺の陶器商や印物屋で絵付けが行われていた。

絵付けの手法については主に2種類の方法がある。ひとつは筆による手書き、もうひとつはゴム版での型押しによる絵付けである。ゴム版は大正5年（1916）に開発された手法で、これによって同じ図柄をある程度まとまった数量必要とする記念盃の製作が効率的にすすめることができるようになった。



徴兵制と近代兵制のはじまり～記念品と徴兵制～

明治維新以後、日本では国の近代化を進めるなかで、富国強兵策が採られた。明治6年（1873）に徴兵令が発布され、これにより、17歳から40歳までの国民男子が兵籍に登録された。登録された男子は、20歳になると徴兵検査を受け、そのなかから実際に兵営に入り、訓練を受けるものが選ばれることになった。

この新しい兵制は、戦闘要員を武士に限っていた江戸時代からは大きく舵を切るもので、出身階層にかかわらず、広く国民に兵役を負担させるものであった。

下の盃は、明治初期の陸軍幹部養成機関のひとつ、教導団で学んだ後、下士官（歩兵二等軍曹）となった兵の所持品であったもの。

下士官は、軍隊にあって、志願して軍人となる将校と、こうした徴兵による兵との間に位置し、彼らを統率する役割を担った。

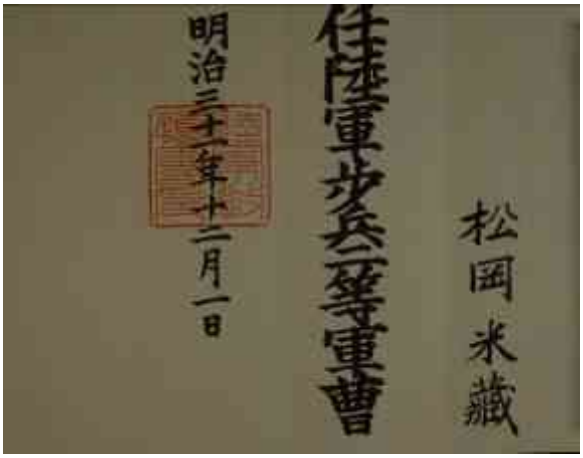
この盃の所有者であった下士官自身も滋賀県栗太郡御園村（現在の栗東市御園）出身の農民であった。記念品からも、国民皆兵を目指した時代が伺える例である

	徴兵検査（満20歳）		17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
兵	甲種 役 第義乙種 務 第表乙種	陸軍常備役兵	第二国民兵役			現役		予備役（5年4ヶ月）						後備役（10年）										第一国民兵役		
		海軍常備役兵	第二国民兵役			現役			予備役（4年）					後備役（5年）					第一国民兵役							
		陸軍第一補充兵役	第二国民兵役			第一補充兵役（12年4ヶ月）													第一国民兵役							
		海軍第一補充兵役	第二国民兵役			＊1	第二補充兵役（11年4ヶ月）												第二国民兵役							
		第二補充兵	第二国民兵役			第二補充兵													第二国民兵役							
	丙種		第二国民兵役																							

＊1…第一補充兵役

本表は、昭和2年（1927）公布の兵役法に基づき、『事典　昭和前期の日本　制度と実態』（伊藤隆　1990年）、『立命館大学国際平和ミュージアム常設展示図録』（立命館大学　2005年）を参照し作成。

教導団盃
明治30～31年（1897～1898）　館蔵
明治30年から翌31年にかけて教導団で学んだ兵が所持していたもの。
教導団を卒業後は陸軍歩兵第九連隊に入隊、明治33から34年にかけて台湾守備隊に派遣された。その後、日露戦争開戦に伴い、明治37年から出征、金州・南山要塞攻略等に参加、遼陽会戦中の8月31日にロシア軍の砲弾が頭上で爆発、戦死した。
盃は、見込部分に金色一色で文字や模様が描かれる。これは古い時代の記念盃にみられる特徴である。
盃に“〇〇記念”などの文言はなく、複数作成し、親類・知人に記念品として配布したものとは性格が異なり、教導団に所属した兵たちがその記念として配布されるか、あるいは作成したものだろう。



陸軍歩兵二等軍曹任命書　明治31年（1898）　館蔵

官名	任官の形式 等級	階級	
兵			徴兵による
下士官	判任官	曹長	志願による
准士官		特務曹長	
将校	奏任官	少尉	
		中尉	
		大尉	
		少佐	
		中佐	
		大佐	
	勅任官	少将	
		中将	
		大将	
	高等官八等		
	高等官七等		
	高等官六等		
	高等官五等		
	高等官四等		
	高等官三等		
	高等官二等		
	高等官一等		
	親任官		
	一等		
	二等		
	三等		
	四等		
		軍曹	
		伍長	
		上等兵	
		一等兵	
		二等兵	

陸軍の階級表（昭和6～15年）

『事典　昭和前期の日本　制度と実態』（伊藤隆　1990年）を参照に作成。

日清・日露戦争

明治維新以後、日本は西洋列強と同じように、自国の植民地を確保したいと考え、その目標としたのが朝鮮半島である。朝鮮半島を巡っては、明治27～28年（1894～1895）にかけて清国との間で、その10年後の明治37～38年（1904～1905）にかけてはロシアとの間で日露戦争を戦った。

いずれの戦争においても日本は勝利し、日清戦争では台湾と澎湖諸島を、日露戦争では朝鮮半島での日本の優越権、さらには満州での権益を手に入れた。

兵士の記念の盃は、日清戦争の戦勝を契機に作られるようになった。記念盃の産地である東濃地方、なかでもその後全国に流通した記念盃の大半を取り扱った多治見では記念盃の出荷が相次いだ。

日清戦争に始まる兵士の記念盃の贈答は、その後の日露戦争において全国的な戦勝記念ブームに乗って、広まっていくことになった。

明治三十七八年戦凱旋紀念盃　明治38年（1905）ごろ　　館蔵
盃の高台内側に、「明治三十七八年戦凱旋紀念」と記される。明治三十七八年戦役は、日本がロシアと戦った、日露戦争の政府による正式な呼称。したがってこの盃は日露戦争戦勝を記念して作られた盃である。所持していたのは教導団盃（前頁左下）を所持していたのと同じ兵士。この兵士は日露戦争従軍中の明治37年8月31日に戦死しているため、その後に作成されたものである。
後の時代につくられた盃の多くが陶器製であるのとは異なり、この紀念盃は木製で漆が塗られた手の込んだものである。日清・日露戦争時には兵士個人が記念として贈答用に作る記念盃のほかに、軍や市町村から兵士に凱旋の記念盃が贈られることが行われた。前者は陶器製が多く、後者は銀製や漆塗りのものが多くみられるとされる。
この記念盃も、兵士はすでに戦死しているため、個人で作成したものではなく、所属の軍やあるいは出身の金勝村から贈られたものであろう。

征露紀念盃　明治37～38年（1904～1905）ごろ　　館蔵
盃内側に大きく十字を表し、そのまわりに「征露紀念」の文字が記される。日露戦争に従軍した兵士の記念品であろう。十字は衛生兵を表すものだろう。

記念品に用いられる意匠

星章
陸軍を象徴して用いられる。軍帽等に用いられた意匠。
（満期解隊記念盃（盆）　近代　館蔵）

日章旗・旭日旗
日章旗は日の丸、旭日旗は陸軍、海軍の軍旗として用いられた。軍を象徴する意匠。
（凱旋記念盃（部分）　近代　館蔵）

桜・錨
桜は陸軍、海軍を象徴し、錨は海軍を象徴する。桜と錨の組合せなら海軍を、桜だけであれば陸軍を象徴して用いられる意匠。
（海軍凱旋満期記念盆（部分）　近代　館蔵）

桐紋
桐紋は天皇家が用いた紋章。天皇が統帥する日本軍を象徴する意匠。
（解隊紀念（部分）　近代　館蔵）

贈り、贈られる記念盃

軍隊、町村から贈られる記念盃・兵士から贈られる記念盃
記念盃は、①軍隊や町村から兵士に贈られるもの、②兵士から贈られるもの、の2つのパターンがある。前者の特徴は、銀製や漆器などの製品が多く、「賞盃」という性格のものである。後者の多くは陶磁器製のもので、入営や出征に際して贈られた餞別に対する「土産」の性格がある。
賞盃としての記念盃が贈られる場は、凱旋記念の歓迎会や除隊兵士の慰労会など、土産としての記念盃が贈られるのは、兵士が帰郷してから、餞別をもらった家を個別にまわるなか、ということが多かった。
軍隊や町村から贈られる記念盃は、日清・日露戦争のころにみられ、それ以降は姿を消していく。大正元年（1921）には、除隊した兵士の組織、帝国在郷軍人会が中心となって、「除隊土産禁止キャンペーン」を行っており、軍隊側からの記念盃の製作は鈍化したとみられる。しかしながら、土産としての記念盃は日清・日露戦争以後ますます盛んとなった。こうした習慣は日中戦争期までは盛んに行われていたが、太平洋戦争期には国内の物資不足や陶磁器生産に対する国からの統制などもあり、大幅に数を減らしていく。

せまる戦争の時代～大陸への進出～

日露戦争の終結によって、日本は開戦当初の目的であった、ロシアとの間での朝鮮半島における優越権のみならず、満州における権益をも手に入れることに成功した。

ｂ日露戦争で手にした権益は後に“二十万将兵の血と二十億の国費の結晶”などといわれるようになる。以後、日本はこの権益に固執するあまり、結果的には満州事変、日中戦争開戦、ひいてはアジア・太平世戦争敗戦への道をたどることとなる。

日露戦争以後の朝鮮半島や遼東半島、その周辺をめぐる動きとしては、明治43年（1910）、日本が韓国を併合したことで、朝鮮半島の植民地化が完遂された。
また、大正３～７年（1914～1918）にかけて起った第一次世界大戦ではこれに乗じて中国大陸へ出兵。日本は山東省におけるドイツの権益を手にすることに成功する。

さらに大正7～11年（1918～1922）にはシベリアへ出兵した。この背景には、大正6年（1917）にロシアでの社会主義政権の成立がある。日本のほか、イギリス・フランス・アメリカも中国での社会主義拡大防止を狙って出兵したが、大正8年（1919）にはいずれも撤退した。そのなかで、日本だけが大正11年まで兵を置き続け、その結果なんの収穫もないまま撤兵することとなった。

朝鮮駐剳記念盃　明治43年（1910）～昭和20（1945）年　館蔵
盃内側に桜の意匠と、「朝鮮駐剳記念　第七十八連隊　谷口定」と記されている。朝鮮駐剳軍は、日本が朝鮮に駐留させた軍隊で、明治37年（1905）日露戦争開戦を契機に置かれた。明治43年（1910）の韓国併合によって、韓国の国号は廃止され、それに伴い軍の名称も朝鮮駐剳軍と変更された。朝鮮半島には昭和20年（1945）のアジア・太平洋戦争の敗戦にいたるまで、名称を変更しながらも、日本が軍隊を置き続けた。この盃は日本が大陸へ進出していった時代を映す資料である。

西伯利亜出征凱旋記念盃　大正8～11年（1919～1922）　館蔵
盃の内側面には「凱旋記念　西伯利亜出征」、外側面には「歩九ノ四　奥村」と記される。西伯利亜はシベリアと読み、盃は陸軍歩兵第九連隊第四中隊に所属した兵士がシベリアへ出征し、無事に帰ってきたことを記念して作成されたものと分かる。日本がシベリアに出兵したのは、大正7～11年のことで、第九連隊は大正8年から派遣されている。

日本による朝鮮半島支配の流れ

年月日	条約･協約	内容
明治32年2月22日	日韓議定書	日本が韓国を第三国からの侵害や内乱から守ることを名目に韓国が日本に利便を与え、軍事上必要な地点を提供することを規定。
明治37年8月22日	第一次日韓協約	韓国政府が日本政府の推薦する財政･外交顧問を採用すること、重要な外交案件は日本政府と協議することを規定。
明治38年9月5日	ポーツマス条約	ロシアとの間で、朝鮮における日本の優越権が承認される。
明治38年11月17日	第二次日韓協約	日本が京城（ソウル）に韓国統監府を設置。統監が一切の外交事務を統監した。
明治40年7月	第一次日露協約	日本の朝鮮に対する、ロシアの外蒙古に対する特殊利益を相互に認める。満州の南北にそれぞれ利益範囲を設定した。
明治43年	第二次日露協約	前年にアメリカによって提案された鉄道中立化案を阻止するため、満州の現状維持と鉄道権益確保の協力を規定。
明治43年8月22日	韓国併合	「日韓併合ニ関スル条約」により韓国は日本の領土とされる。韓国の名称は廃止され朝鮮となる。

（右）満期記念徳利
（左）軍用飛行機･軍艦･鉄兜部分
明治43～昭和20年（1910～1945）　館蔵
徳利の側面に「満期記念」と記されるほか、軍用飛行機、軍艦とともに鉄兜が描かれる。鉄兜には、日本と朝鮮半島、中国大陸の地図が描かれるが、日本列島と同様に朝鮮半島も赤く塗られ、日本の勢力範囲であることが示されている。韓国併合からそう時間を経ない時期につくられたものであろうか。

昭和4年（1929）10月に起ったニューヨーク市場での株の暴落に始まる世界恐慌において、日本では日露戦争で獲得した満州での権益を拡大することで事態の打開を目指した。

特に軍部では満州を軍需資源の供給地としてとらえており、「日本の生命線」という表現がなされまでになっていた。昭和6年（1931）に起った満州事変では、政府の不拡大の意図に反して、現地に駐留する関東軍が暴走、戦線が拡大し、満州の大部分を制圧する事態となった。このことは翌7年の「満州国」の独立宣言へとつながる。

一方、満州事変では、メディアによる国民の熱狂ムードが醸成され、兵士による記念品も数多く流通するようになった。また記念品の意匠もさまざまな種類のものが登場し、このころから日中戦争期にかけて、記念品の贈答は盛んに行われた。

満州事変から満州国成立に至る過程においては、国際連盟が満州国を承認しない事態となり、昭和7年（1931）日本はこの国際機関から脱退、国際社会から孤立することとなった。これ以降、日本は戦争への道をひた走ることになり、昭和12年（1937）からの日中戦争、そしてその戦争が決着をみないまま昭和16年（1941）からの太平洋戦争へと突き進むことになった。

満州派遣記念盃　昭和7～20年（1932～1945）　館蔵
盃の内側面に「満州派遣退営記念」などと記される。日本国旗とともに描かれているのは、「満州国」の国旗で、黄色地の左上に、赤・青・白・黒が記される。国旗を構成する各色はそれぞれ方角を示しているが、それぞれ満州国を構成する5つの民族、つまり日本・満州・漢・朝鮮・蒙古の民族を表す、ともいわれている。
日露戦争以後、日本では満州は軍需物資の重要な供給地と認識されており、資源の乏しい日本では、「満蒙は日本の生命線」と表現されることもあった。満州の支配を確立させることは、日本にとっては重要課題であった。

満州派遣記念徳利　昭和7～20年（1932～1945）　館蔵
徳利側面に「満州派遣」「京都野砲二二　除隊記念」などと記される。

満州派遣記念徳利
昭和7～昭和20年（1932～1945）　館蔵
徳利側面に「満州派遣」「京都野砲二二」などと記される。表面に浮き彫りのように旭日旗や砲弾などが施されているが、これは石膏型から成形したものである。

満州、「満州国」とは

満州は、現在の中国東北部を指す地名。「満州国」は（以下、満州国と表記）この地域にあった、とされる国の名前である。満州国は昭和7年（1932）に独立が宣言され、昭和20年（1945）日本が敗戦するまで存在した。しかしながら、実際のところは日本のいいなりになる傀儡国家であったので、国際的には国として認められていなかった。
政治家や軍人のなかには、満州には土地や資源があり、満州を支配することが日本を国際社会のなかで生き残らせる手段だと考えるむきもあった。そうした考えが下地となり、さらに関東軍の武力をもって満州国は成立した。
満州国成立の翌年から、日本人による満州への移民が始まる。昭和11年（1936）には政府により「二十箇年百万戸開拓民送出計画」が立てられた。また、昭和13年（1938）には満蒙開拓少年義勇軍が募集され、16～18歳の青年が満州へと移住している。満蒙開拓少年義勇軍はその後、たびたび募集があり、多くの日本人が海を渡った。満州に駐留した日本軍は昭和20年8月、ソビエトが満州国へ侵攻すると彼ら移民を残して撤退したため、多くの人が大陸に取り残されることとなった。

アジア・太平洋戦争

昭和12年（1937）、北京郊外の盧溝橋付近で起った日中両軍の小競り合いは、次第に本格的な戦闘状態へと移行し、日中千戦争が始まった。この戦いはすぐに決着するという日本側の目論見に反して、中国側の激しい抵抗から戦争は長期化した。このような日本の中国侵略に対しては、アメリカやイギリスなどから非難が高まった。昭和16年（1941）、アメリカは日本への石油輸出制限を切り札に中国大陸からの撤兵を求めたが、両者の交渉は決裂し、ついには中国との戦争が継続するなかで日本はアメリカとも戦争する事態となった。

中国、東南アジア、太平洋と戦線が拡大したうえ、燃料など輸入に頼る物資は不足を極めるなか、日本軍の戦況悪化は必死であった。政府は国家総動員法などを発布して、総力戦で戦争を遂行したが、戦況が好転することなく、昭和20年（1945）8月、無条件の降伏を受け入れて敗戦となった。

支那事変出征記念盃　館蔵
盃内側に「支那事変　凱旋記念」とある。旭日旗と日章旗が交差するデザイン。支那事変は、日中戦争の当時の呼び方。

日支事変出征記念徳利　館蔵
徳利側面に「日支事変出征紀念」とあり、日章旗と旭日旗、星章の意匠が描かれる。日支事変は日中戦争を指す用語で、当時は北支事変などとよばれた。日本政府による正式な呼称は支那事変である。日中戦争に従軍した陸軍兵士の記念品である。

支那事変凱旋記念盃　館蔵
盃内側は日の丸のデザイン。さらに、日の丸の上に「支那事変」、下に「凱旋記念」の文字が記される。

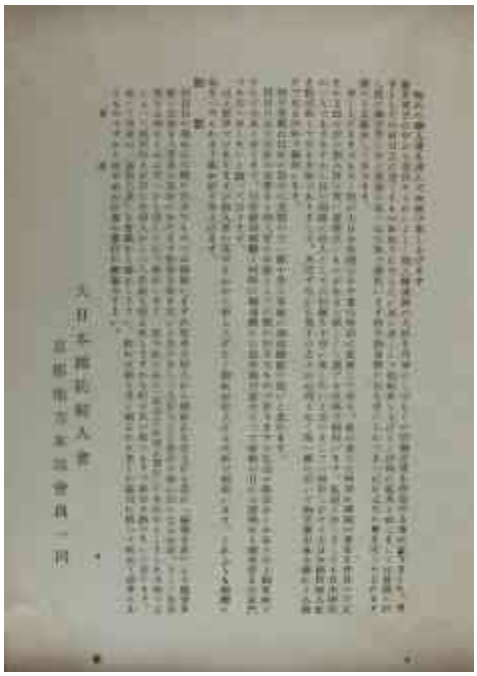
日支事変期間記念徳利　館蔵
徳利側面に「日支事変帰還記念　片岡兄弟」とあり、日章旗、旭日旗と星章が描かれる。日中戦争に兄弟で従軍した陸軍兵士の記念品である。

日清戦争以降、兵士が餞別の返礼とした記念品、なかでも盃は早い段階から軍隊側で廃止を唱える動きがあった。盃は実用性が薄いうえ、餞別の返礼とはいえ兵士やその家族にそれなりの金銭の負担を伴うものであったからである。

館蔵の大日本国防婦人会名誉国旗納入箱には、おそらく記念盃や徳利などを指すとみられる「満期土産」の廃止を訴える文言が記される。名誉国旗納入箱は日中戦争期に大日本国防婦人会が入営者に餞別として贈っていたもので、兵士を送り出す地域の側からも記念盃、徳利廃止に向けた運動が起っていたことが伺える。

こうした記念品廃止運動とともに、太平洋戦争開戦による戦争の長期化に伴う深刻な物資不足と、戦局の悪化によって製造の前提となる無事の帰還を遂げる兵士が激減したことで、記念品の製造は減少した。しかしながら、昭和20年（1945）の敗戦に至るまで産地の東濃地方では細々ながら製造されており、地域と兵士との間の贈答の関係は途切れることはなかった。

そして、昭和20年8月15日、ポツダム宣言の受諾によって日本の敗戦が決まると同時に、盃や徳利などの記念品はその役割を終えることになったのだ。



大日本国防婦人会名誉国旗納入箱蓋裏書
尚別包の御祝品は洵に粗末なものでは御座いますが従来各個人から御祝品を差上げる為に「満期土産」とて随分多額の負担を入営者の家庭にかけます弊害を除き度いと思ひまして入営なさる皆様が御心配にならぬ様、そして有意義な品物をと云ふ考へから選んだ品で御座います。即ち此の品は「満期土産廃止実行」の手始めとしました次第で之によって国防婦人会員は各個人からの入営祝を廃止致しますから何卒其の御つもりで御含み願ひたいと思ひます。従って将来は「満期土産」を皆様から廃止し下さい。此れは贈る者と贈られた者との協力に依って始めて効果あるものですから何卒此の計画の実行に御協力下さい。

大日本国防婦人会名誉国旗納入箱
昭和12～16年（1937～1941）ごろ　館蔵
大日本国防婦人会の京都地方本部のもとで配布していたもの。滋賀県域が京都地方本部下にあったのは昭和16年までであるので、それまでに満期土産廃止が叫ばれていたのであろう。

主な参考文献
「記念盃にみる地域社会-凱旋・除隊記念を中心に-」北口　由望（専修大学大学院文学研究科歴史学専攻修士論文　2006年）
「日清戦争期における凱旋記念の社会展開」（『専修史学』第42号　2007年）　北口　由望
『多治見の陶器商と近代の美濃焼』（多治見市教育委員会・文化財保護センター　2011年）
「近代の美濃窯における生産流通構造-「地域的分業生産」と多治見の陶磁器-」春日美海（『瀬戸・美濃窯の近代-生産と流通-シンポジウム資料集』財団法人瀬戸市文化振興財団　2012年）
『兵隊盃　平和への無限の思い』（加藤六月　1984年）

謝辞
本展開催にあたって、特に東濃地方での記念盃、徳利の製作の項については、北口由望氏（専修大学）、春日美海氏（多治見市文化財保護センター）から多大なるご協力とご教示、資料提供を得ました。記して謝意を表します。
また、本展開催にあたっては下記の方々のご協力・資料提供を得ました。記して謝意を表します。
滋賀県立平和祈念館　多治見市立図書館　多治見市文化財保護センター
井上こま・大町ゑい・奥村ちゑ・北川美代子・北村美香・里内定雄・島田忠次・高田忠司・千代嘉寿夫・西田淳男・堀池栄一・三浦平三郎（50音順　敬称略）

凡例
1. このパンフレットは、平成25年7月27日（土）から9月1日（日）までを会期とする、栗東歴史民俗博物館のテーマ展「平和のいしずえ　2013」のパンフレットである。
2.記念品の文字は資料名については資料に沿って紀念、記念の文字を使用した。また本文については記念の文字を用いた。
3. 本パンフレットの執筆・編集は大西稔子（本館学芸員）が行った。

テーマ展「平和のいしずえ　2013」

会　　期●平成25年7月27日（土）～9月1日（日）
編集発行●栗東歴史民俗博物館
滋賀県栗東市小野223-8
TEL 077-554-2733
U　R　L ●http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan/